道徳の実行と喜び

望月幸義

目次

一、序
二、人間の本質は喜びにある
三、最高道徳は喜びをもたらす道徳である
四、悩み・苦しみを減らすもの
五、最高道徳は、最高の喜びをもたらす道徳
六、喜びを見えずらくしている理由
七、喜びの作り方

一、序

最高道徳の中核を成している代表的な言葉は、神、自然の法則、精神作用（心づかい）、安心、幸福、自我没却、伝統、義務先行、人心開発救済、慈悲、至誠、因果律などがあるだろう。これらの言葉の意味内容は相互に密接不可分に関連している。

これらの言葉の中でも最も中心となっているものは、神、安心（喜び）、精神作用であるといえる。つまり、最高道徳は神意同化（愛）の道徳であり、心で実行する道徳であり、喜びに満ちた、喜びを実現する道徳であるといえる。このような認識が極めて重要であると考える。神（愛）、精神（心、考え方）安心（喜び）はもっともっと強調されるべきであり、そうすることによって、モラロジーと最高道徳に対する取り組み方も変化していくで

あろう。これを一言でいうと、神の心に同化して生きることが最大の喜びをもたらすということを示した道徳（学問、教え）である。

最高道徳の中核に喜びがあるということはなかなか掴みずらいことである。その理由の大きなものとしては、以下のものがあるだろう。

①喜びという表現が少ない。

②安心という言葉は、至るところに使われているが、安心すなわち喜びであるというように結びづけづらい。

③最高道徳は難しい、簡単には効果が出ないと考えられている。

④一般人は悩みの多い人生を送る傾向があり、道徳に対しても苦しんで実行するものであるという常識が広がっている。

⑤広池千九郎が『道徳科学の論文』を書いた時代（大正後期から昭和初期、または戦前）には、喜びという言葉は現在よりも多少とも悪い意味が強かった。つまり、経済的に苦労の多い時代においては、喜びを求めることは、利己的であり、喜んで生きている人は怠け者と見られる傾向があった。

それにもかかわらず、最高道徳は、最高の喜びを実現する道徳であるといえる。『道徳科学の論文』、その他の原典をよく読めば、このことが浮かび上がってくる。以下、喜びに関連させて、最高道徳の世界を考察してみよう。

二、人間の本質は喜びにある

すべての人間は喜びを求めている。私たちは、より喜びの多い人生にするために日夜努力しているといっても

良いであろう。広池は、「神は人間を楽しましむるために社会を創められたり」（遺稿）、「元来、人間は、聖人や異常心理の人を除けば、何物かその精神もしくは肉体を慰安するものなくては生きておられぬものであります」（⑧二八一）、「おおよそ人間生活の真の味は安心及び幸福にあるので」（⑦四〇五）などと、人間と人間生活の本質が喜びにあることを述べている。なお、中江藤樹は「心の本体は喜びである」と述べ貝原益軒は「心は常に楽しむべし、苦しむべからず」と述べている。

『道徳科学の論文』には、喜び（安心）という言葉は、注意深く読めば至るところに出ている。その中心は何といっても安心という言葉である。この言葉には、喜びの内容が深く含まれていると読みとるべきである。ここで、安心、喜び以外の喜びに関連する言葉を拾いあげておこう。

安心、喜び、安心立命（⑧三九八）、楽しみ（楽しんで）、心が安らか（⑦四一七）、喜んで、不安がない、苦しみがない、歓喜、精神が平和、愉快（語録）、光明（神の光明⑦五〇）喜色（⑨三四七）、黄金世界、平安、気が楽、慰安、円満、快い気分（⑧三七二）、興味（おもしろみ、語録六八頁）無上悦楽、極楽世界、タンノウ（日誌）、陽気づくめ、満足、明るくほがらかな気分（①序四二）その他。

いくつかの文章の例を示しておこう。

「自我を没却したらんには、その自己の心たちまち非常に平和となり、その人格は円満となって、真に愉快に社会に生存する」（⑦一九八）、「最も愉快に且つ円満にその生活を持続しつつ」（⑦四八）、「かような心使いにてその日を送ってごらんなさい。真に心の中が平安で、気が楽で、弱い身体も強くなり」（遺稿）、「すべてわれわれがその伝統を尊重するときには、初めには上のものに愛せられて安心しつつ出世し、後には下のものに敬われて安心しつつ楽しんでわが子孫（肉体の子孫のみでなくして主に精神的の子孫がたくさん出来ておるはず）の繁栄

していくのを見て」（⑦三八三）

なお、次のような表現もされている。

「真に一視同仁、世界救済の大慈悲心に住して、世の改造を思い廻らさば、胸中豁然として大洋に旭日の昇る心地すべし。」（遺稿）

三、最高道徳は喜びをもたらす道徳である

モラロジーは、幸福実現の科学であることはよく知られている。しかし、この表現は正確ではない。モラロジーは、安心と幸福を実現する科学である。このように表現すれば、モラロジー（最高道徳）は喜び実現の科学であるということになる。広池がいわゆる幸福を安心（精神的要素）と幸福（客観的、物質的要素）に分けて説明している点に、私たちの誤解の源がある。一般的には、幸福という言葉には、精神的要素と客観的、物質的要素の両方が含まれていると考えられている。そして、時代が進むにつれて、これら両要素の中で、精神的要素のウエイトが大きくなってきたのである。現代のように、健康、長命、開運などの客観的、物質的要素においてはある程度満たされてきた時代では、幸福感、充実感、生きがい感、喜び、悩みがない状態などの精神的要素が、幸福の中心を占めるようになっている。安心という言葉にはこれらの精神的要素すべてが含まれていたのである。

しかも、広池にあっては、安心と幸福を比較した場合、安心の方を重視していたと解釈できる表現もたくさんある。

例えば、「安心なくして幸福なし」（遺稿）

「真の幸福は人をも己をも気楽にする」（遺稿）

「どんなに健康、長命、開運、子孫繁栄であっても、心に安心のない人生は無意味である」（遺稿）

また、次のような内容からも、安心、喜びの重要性を読み取る必要があるだろう。

「安心立命」（⑧四一二）という言葉も多く使用されている言葉であるが、立命は開運を中心的意味としながらも、健康、長命、開運、子孫繁栄を意味していると言ってよいだろうから、安心立命は、安心と幸福と同義になる。従って、安心を重視しているのである。更に、「真の肉体の子以上の子がたくさん出来て、精神上の楽しみはもちろん、物質的にもまた大なる幸福を享受し得べく」（⑦三七七）、「かくして自己の安心はおのずから成立して、健康・長命…」（⑧四一五）

「すべて自分は生涯一生懸命に働かして頂いて、その結果は悉くこれを神様に供えて、自分の因縁果しにさして頂くという心使いをもって、感謝して喜んで働くというのですから、こういう心を定めて下さったならば、その心は極めて楽になりまして、心配も気苦労もなくなるのです」（『助け一条の御話』二三頁）

「ここまでの事が分かって実行を万分の一でもしたらば、全く心が楽になり安心がつき、追い追いには具体的に効果が現われて、だんだん子孫まで幸福になるのです」（遺稿）などという文章がある。これらにも、幸福に対する安心（喜び）の重要性が明白に示されている。

次に、道徳は喜んで実行するものである。「喜んで道徳の実行を行う」（①九三）、「何をもって楽しんで道徳を行うものがありましょうや」（①一五）、「聖人は別として、およそわれわれの尋常人中には、これを聴き喜んで道徳の実行をなす人は漸次になくなることと考えられます」（①九二）

「しかし倫理学がいかに進歩しても、道徳の原理がいかに明らかになっても、道徳実行の効果が明らかに証明せられぬかぎりは、聖人もしくは偉人を除きて、普通の人に楽しんで道徳を行わしむることはできぬのでありま

す」（①五九）

「たとい人を愛し世を憂うることでも、我心を苦しむることはみな埃になるのです」（遺稿）

「形は苦しみ心は喜び徹底して光を発す」（⑨三八三）、「双方喜ぶことにあらざれば、道徳にあらず」（遺稿）

また、「三方よし」の概念にも、喜びが含まれていることは当然である。

最高道徳と普通道徳の相違の一つとして、喜んで実行するか、苦しんで実行するかがあることも重要である。私たちが、道徳の実行を苦労、苦痛、苦しみなどと結びつけ易いのは、普通道徳の世界に慣れ親しんでいるからに過ぎない。いくつか引用しておく。「第二十二項　普通道徳の実行は苦心多く、最高道徳の実行はかえって苦心すくなし。道徳の質の問題は、結局、形式的と精神的とによりてその差を生ずるのであります。従来の因襲的道徳にても、今回の最高道徳にても、忍耐・克己・熱心・勤勉・力行・質素及び倹約等は同一に行うを要すれど、甲はただこれを形式的に行う故に、苦心多くしてわが肉体を害し、且つ他人に不快もしくは苦痛を与うるのであります。乙はこれを精神的すなわち他人〈相手及び第三者〉を愛する慈悲の心よりこれを行う故に、わが心の苦しみ少なく、且つ他人の心を苦しむることがないのであります。最高道徳においては、たとい他人を形の上には苦労させても、その人々がますますこちらに心服してくるのであります。且つ第三者にもその感化を及ぼすことを得るのであります。

従来の普通道徳においては、たとい自らその心を苦しめ、且つ他人に不快の感を与えても、右のごとくに形式上に苦労するものを賞美したのであります。その理由は、かくのごとき人の努力は、事業の上には一時的ながら能率を挙げますからであります。しかしながら、終わりにその人の健康を害し、もしくは不平の勃発するごときことあらば、その人及び相手方の双方の損失となるのであります」（⑧三四八―三四九）

「故に普通道徳を行えばとて、真に我心が楽にならず安心ができず、かえってこの道徳の実行を苦労する人程、健康を害し疫病をかもし短命を促し、一面に味方できれば、他の一面に敵を生じ、精神常に平安ならず」（遺稿）

最高道徳は喜び、楽しんで実行し、自分自身に喜びをもたらすと同時に、他人に喜びを与えるものである。このような文章を二―三引用しておく。

「徳とは、他人に喜びを与えること」（語録）、「人を益し喜ばすには、どうすればよいかと思う心が道徳なり」（日誌、大正五年六月二一日）

「人を助ける心使いにて、人の喜び、人の幸福となることならば、自分がどんなことでも苦しくないという、物を育てる慈悲の心で、低き、やさしき、柔らかな心持にて行うのですから」（『助け一条の御話』）

「他人に対しては公平にして親切至らざるところなく、かつ伝統及び準伝統をはじめ、すべての人々に安心を与うる精神を有し、よくその接触する人に対して満足と快感とを与うるのであります。もし然らずして他人に不平を懐かせ、もしくは怪訝の念を起こさするごとき行動あらば、その人はたといいかに深く最高道徳を信ずるも、いまだ最高道徳にて真に救われた人と称することは出来ないのであります」（⑧二四六）

四、悩み・苦しみを減らすもの

道徳は喜び（安心）をもたらすものであるということは、裏を返せば、道徳は悩み、苦しみを減らすものであるということになる。この点を考察することによっても、最高道徳の世界が喜びの世界であることが理解できるであろう。

私たちは、喜び一杯の人生を求めているにもかかわらず、悩みと苦しみの多い人生を送っている。その理由に

ついて分かっている人が少ないからである。結論的にいえば、悩みと苦しみの原因は、自我の心（利己心）にある。また、喜びをもたらす大きな力である道徳の力を十分に用いていないからである。

一般人が悩みと苦しみの人生を送っていることについては、たくさんの記述があるが、いくつか示しておこう。

「その人の精神には種々の不平もしくは不安を生ずることありて、その精神に真の楽しみなく」（⑦九三）、「心に楽しみなくただ多忙なるかたち」（遺稿）、「心を苦しむるが故に」（⑧三四九）、「その有するところの財をもって外形上の虚栄を競うことに忙しくて、道徳もしくは信仰のごとき真面目なることによりてその心を楽しましむることは出来ぬのであります」（⑧三六〇）、「故に力にて立つ人は何の楽しみもなきものであります」（⑦三一三）、「次に事業上の困難に対する自然の法則を理解してこれに処する品性を具えておらねば、何人にても安心の出来るものではないのであります。しかるに現代人は多くみなその方法を誤っておるのであります。すなわち現代人のある困難に対する方法すなわち対策はみな政策的でありますから、その自己の精神を苦しむること甚だしく、且つその困難はその政策を重ぬるにしたがって、ますますその度を加え、ついに自己及び自己所属の団体の退化もしくは滅亡を来たすに至るのであります」（⑧四〇五）

「今はたとい或る神仏もしくは宗教の信仰をなしてその精神の一部分に何らかの光明を認めておる者でもその大部分は普通道徳の範囲を脱しておる者はないのであります」（⑧一九四）

「自分の仕事の結果を求むればこそ心配があるのです。結果を求めずに、ただ自分が働かせて頂くだけでよろしいとなれば、心配も気苦労も全くなくなるので、心が楽になり全くこの世ながらの極楽です」（『助け一条の御話』八頁）

悩み、苦しみ、悲しみをもたらすものは自我の心（利己心）にある。自我の心とは何だろうか。高慢心、我慢

心、不平・不満の心、要求心、欲心一般、怒り、不安、妬み、羨望、極端な謙遜、自分中心の心に基づいた熱心、克己、親切心、義侠心など。そこで、自我没却の原理は、喜び実現の原理と言ってよいだろう。

五、最高道徳は、最高の喜びをもたらす道徳

先に、普通道徳は苦しみが多いと述べた。もちろん、道徳自体は多少とも喜びをもたらすものであるから、普通道徳も苦しみばかりでなく、多少とも喜びをもたらす面があることも事実である。しかし、最高道徳は最高の喜びをもたらす道徳である。それは、最高道徳は神の心に同化する道徳であり、明朗清新、黄金世界、極楽、神の光明などを実現することを目ざす道徳であるからである。この点に関連する文章を引用しておく。

「この故に最高道徳はすでに前に述べたるがごとく、個人の開発もしくは救済を目的として、団体に向かってその改善を促すというようなことはせぬのであります。まず個人の精神の中に神の心が宿って、その個人の精神が慈悲となり、平和となり、且つ人心の開発もしくは救済をなそうというような精神ができましたならば、すなわちその個人の精神内に黄金世界が現れたのでありましょう」（⑨二五二）

「モラロジー及び最高道徳は科学の本質として一定不変の因果律すなわち無為法の現世に存在することを証明し、現世において真の安心、平和及び家運不朽の極楽世界に到着する方法を教う」（①七九）、「いかなる人、いかなる事情の中に住する人でも、ひとたびその精神に最高道徳の原理が真に理解されたならば、たちまちにして自己の胸中に一大光明の天地が開展されまして、その自己を囲繞しておるところの社会に交わりて、最も愉快に且つ円満にその生活を持続しつつ、四囲の人々を感化することが出来るのであります」（⑦四八）

「最高道徳の実行者は、常に質素・倹約・勤勉且つ努力をなして、虚飾を斥け、真面目の生活をなしますから、

これを外部より見るときには、非常に苦しんでおるようであります。しかしながら、その精神には世界の人心を最高道徳的に開発して世界の平和と人類の幸福とを実現しようという大理想を有しておりますから、その精神は無限の楽しみを含んでおるのであります。故に、容貌端正・喜色満面、しこうして最後に至ってその人の品性は社会の人心に貫徹して、ついに偉大なる光明を放つに至るのであります」（⑨三八三）

諸聖人ならびに広池は生涯にわたって多くの苦難に直面したにもかかわらず、心の喜びは失っていないというべきである。そのことを広池は、諸聖人にとって、「無上悦楽の業」であったと述べているし、広池自身も「現に私は近く約二〇年間かくのごとき状態に処して、その精神の楽しきことを体験しておるのであります」（⑧二八五）と述べている。また、次の文章は春子夫人に宛てた手紙の一節である。

「貧苦と病苦と闘うても、生きておるだけをお喜びください。貧苦の間にも、後のたのしみはたくさんあります。おそらくは我々のごとくたのしみのあるものはあるまい」（遺稿）

ここで、喜びの種類について述べておこう。喜びは質的にも量的にも、ピンからキリまで限りない種類のものがあるといえるだろう。そして、その質と量を客観的に測定することは不可能であるから、なるべく質的に良い喜びをたくさん実現することが望ましいということになる。この区別について、広池はまず安心を普通の安心と真の安心に分けている。真の安心は、永続的な安心であり、質の高い安心である。同様の意味では「形の上の安心」と「心の底からの安心」（⑧四〇八）という言葉も使用している。また、明朗清新の解（①序四二）においては、「明朗清新」という言葉は二つの意味をもっているとして、「第一は人間が自分の利己的本能に統合した場合には、何人でも一時「明るく、ほがらかな気分」になるのです。第二は最高道徳の実行によりてその自分の精神作用及び行為の偉大さを自分ながら感じて自信を生じたときには、真に「明るく、ほがらかな気分」を生ずるの

であります。（中略）第二の場合は最高道徳を実行して天地の公道に合した精神作用及び行為の上から尋常人の堪えられぬ自己反省をなすとか、義務先行をなすとか、人心救済に突進してその仕事に成功するとかいうときには、名状すべからざる明朗清新の気分が起こるものであります。それは真正的且つ永久的に安心、平和及び幸福の実現する要素を含むものにて、実際上、後にはそのとおりになるのですから、その明朗清新の感は永久に続くのであります。（中略）しかるに、最高道徳ではすべての事を調和円満の中に見出して処置するのですから、常に自己の運命を反省して、事あるごとにますます至誠慈悲の神の精神に向かって進み、おのずから自己の内面から明朗清新の気分を造って、いかなる逆境をも喜びつつ切り抜くるのであります。故に、健康をも害せず、人望をも失わずに堂々として進むことができるのであります」（①序四一―四三）

そこで、私たちは自分が享受している喜びの質と量を常に反省し、喜びの質を純化していくことを忘れてはならないだろう。

六、喜びを見えずらくしている理由

モラロジーを学び、最高道徳を実践しようとしている私たちにとって、喜びはかなり見えずらいものとなっている。ここでは二つの理由を挙げておく。

①難しいということ

第一は、モラロジーと最高道徳の難しさである。一般に、難しいものは喜びとは結びつきずらい。もちろん、中には、難しいが故に楽しいという人もいるが、そういう人は例外であろう。最高道徳は本当に難しいのであろうか。答えは難しいといえば難しいし、易しいといえば易しいということである。しかし、ここでは易しい面を

自覚することによって、喜びが浮かび上がってくることを強調しておこう。

最高道徳の実行を難しいと考えてしまう中心的な理由は、『道徳科学の論文』の中には難しさを強調している個所が多いということである。例えば、「言うことは易く行うことも易く心事いは極めて難し」（⑨三三三）、「昔は言うことは易く、行うことは難し」と申しておりましたが、今日にては人知進歩して、言うことも行うことも易くなったのでありますが、その精神作用すなわち心使いが難いのであります。真にわが精神を神の心と一致させて、その心使いを真の慈悲にすることは実に難いのであります」（⑧三七四）、「真に救済さるるまでになる人は暁天の星より少ない」（⑧二四三）、聖書の「富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい」（マタイ一九―二四）（⑧三五〇）、「慈悲心の完成の困難なことを知悉している」（⑦九八）

このように、論文の中には、難しいという言葉は見つけ易いが、易しいという言葉は見つけずらいのである。

②効果の基準が高すぎること

最高道徳を難しいものにしているもう一つの大きな原因は、効果の基準が高すぎる点にある。一般に、モラロジアンが効果の基準と考えているものは、健康、長命、開運、子孫繁栄であるが、この基準は大変実現の困難な基準であると言わざるを得ない。例えば、長命を実現するだけでも容易ではない。まして、健康、長命、開運、子孫繁栄のすべての条件を満たすことは、多少極論すれば至難の技であるだろう。そこで、モラロジーを学ぶ私たちは、効果はなかなか出ないという気持ちをもち易いのである。つまり、難しいと考えてしまうのである。

広池は、短期的効果を認めていなかったのであろうか。広池はそれを十分に認めていたことを理解すべきである。その効果とは、安心という言葉である。道徳を実行すれば、直ちに安心になる。心の喜びが得られるのである。ところが、安心という言葉の与える印象は、短期的効果というよりも、長期的効果の意味が強いものとして

受け止められ易いため、なかなか短期的効果を理解できなかったのである。既述のように、安心には二つの種類、短期的安心と長期的安心がある。

精神作用の因果律も短期的なものを中心としている。ところが、この点でも短期的効果を理解しずらかった理由は、私たちの常識に帰因している。つまり、道徳実行の因果関係を形の因果と捉えているからである。道徳は心で実行するものであり（原因）、結果も心に現れてくるもの（安心、喜び）という考え方に立てば、日々、一瞬一瞬に因果関係は成立しているということになる。

広池の記述は、このような短期的効果よりも長期的効果（莫大な効果）の方にウエイトが置かれているともいえる。そういう記述をした理由は短期的効果が出るのは、簡単であり、当然なことであり、そういうものは宗教に任せておけばよいと考えていたのではないだろうか。モラロジーは、宗教以上のすばらしい効果を目ざしたものであることを強調したかったのである。しかし、凡人である私たちにとって、短期的効果も極めて重要なのである。良い効果ならば、早く出た方がよいのは当然であろう。

広池自身の言葉の中には、安心以外にも、短期的に効果が出ることを示したものが随所に見られる。いくつか挙げておこう。

「その平素の一言もしくは一行を累積すれば、大なる徳を形成し得るに至り、僅々の間にその運命は変じて一家喜悦の生活を開くことを得るのであります」（⑨三八二）、「ひとたびその精神に最高道徳の原理が真に理解されたならば、たちまちにして自己の胸中に一大光明の天地が開展されまして」（⑦四八）、「ひとたび最高道徳を体得せる青年・処女にありては、いかなることもわずかなる時間においてみなこれを成功するに至るのです。」（⑧三八二）、「ここに至って事業に成功すること、富を致すこと、社会によき地位を得るとのごときは、実に容易なる

ことであるのみならず」(⑧三二五)、「実に気が楽で、たちまちに助かるのです。」(『助け一条の御話』七一頁)、「沢山の効果が即時に現れてくる」(遺稿)

③最高道徳の実行の真の難しさと易しさ

次に、最高道徳の実行と困難であるとした理由について理解しておく必要がある。それは、神意を実現することの難しさなのであり、最高レベルに到達することの難しさなのである。最高道徳は神意実現の道徳であり、それは、自我没却、神意同化を中核としている。換言すれば、人間的考えを捨てて(小我)神の心(大我)に同化することの難しさである。私たちはまず真剣に神を求めることをしないし、神意が、私たち人間の心とどのように違うのかも十分理解していない。そこでこのことは極めて困難なことといえるのであろう。

考えてみれば、すべての習いごとや芸術、スポーツ、事業経営などで最高レベルに到達することは至難の技といえるだろう。何事も最高レベルでは難しいのである。広池はこの点の難しさを述べていると考えられる。しかしまた、同時に、すべての事は、途中の段階では易しく進めている場合が多い。物事は一挙には、最高段階には進まない。一歩一歩徐々に前進していくものである。広池もそのように考えていたのである。もちろん「大善を行い一躍して聖位に登る」(⑨三四四)など、一挙に変化するという表現も見られるが、段階的に進むという記述の方が多いのである。例えば、「断えず向上して身を終えるまで努力す」(⑨三三六)、「持久微善を積んで撓まず」(⑨三四三)、「至誠は息むことなし。息まざるときはすなわち久し」(⑨一三八)などである。

また、一部分の実行でよろしいという表現も随所に見られる。例えば、「私の多年の経験に徴すれば、ひとたび最高道徳の主要事項の十分の一にても実行が出来るようになれば、その他の小事項は年とともに自然にその実行が出来るようになります」(⑧二二一—二二二)、「しかしながら、財産その他に成功せる人々が、万一この最高道

徳に感激して、自己の精神の百分の一でも改められて、財産その他の力の万分の一でも人心の開発もしくは救済その他に提供するようになったらば、その力の多ければ多きほど、たちまちにその幸福は大きく得らるるようなるのであります」(⑨一三八)などとある。

以上述べたとおり、最高道徳を易しいものと考えることができる要素は存在しているが、最高道徳を易しいものとすることに対するもう一つの反論がある。それは、論文の次の記述を根拠としている。

「むかし、子貢、陳蔡の困厄のときに孔夫子に勧めて少しく教えの程度を低くしてはいかがやと説きしも、夫子、顔回ともにこれを許さなかったのである」(⑦三七一)

易しくすることが、時代に迎合したり、レベルを下げて、内容を低俗化するものであるから不適当であるという反論である。これに対して、理解のゆくように説明することは容易ではない。ただ、すべての物事は初歩の段階では易しく教える必要があるということである。初めから難しければ、拒否されてしまうだろう。また、難しいものは、多くの人々を勧誘する力をもたないであろう。さらに、初歩の段階を易しくした方が、本来の目的である最高レベルに到達する人数も増えることが期待できるのである。これは、思想の善導や「広く開発し、しこうして深くこれを救済す」(⑨三一三)の精神に通じるだろう。

④暗い印象を与えやすい用語

最高道徳の実行に喜びを見い出しずらいもう一つの原因は、どちらかというと一見暗い印象を与え易い用語の問題がある。例えば、自己反省、絶対服従、借財、犠牲、自我没却、忠誠努力して要求せずなどの用語である。これらの用語は、一般に喜びとは反対の感情をもたれ易いのである。そもそも道徳という言葉自体に、マイナスの印象をもつ人が多い。

しかし、道徳（最高道徳）の実行が喜びをもたらすものであれば、これらの言葉も喜びをもたらすものである筈である。恐らく、広池にとって、これらの言葉は最高の喜びをもたらす、極めて明るい意味をもっていたといえるだろう。この点について、多少考察しておく。

まず、最高道徳の諸原理は喜びをもたらすものである。これを示す文章を引用しておこう。

「第一には自我を没却して神の慈悲心に同化することでありますから、極めて気分が安らかになります。」（⑧四一二）、「これに反し、すべての境遇を自己の各伝統〈神、君主、父母、聖人、その他の恩人〉の賜として、満足し且つ感謝しつつ努力するものが、ついに必ず真の幸福に至るのであります」（⑦一七五）、「その立てかえというのは、天恩を知りて、いかなる事も結構とタンノウする心になり、且つまた、その心を人に伝えて、神の力を助け、人の心を助くることに在り」（日誌　大正元年一一月九日）、「知的には自己の精神作用及び行為の結果が自己を幸福にするという因果律の存在を認めて、その心の中に一つの楽しみを持ちて活動し」（⑦二一三）、「他人の精神を開発しもしくはこれを救済することが楽しくなりまして」（⑨三八二）、「人間ひとたび聖人の教えに従い、最高品性を完成して自然に精神的に苦悩を断除し得るに至らば」（⑧四一一）

なお、広池は、人心開発救済が最高最大の喜びをもたらすものであるとしており、「故に先方の救わるると救われぬとは別問題として、自分の心の楽しいことはこれに越すものなく、いつも何か心の中が賑やかで淋しいということを感じませぬ。（中略）されば、つとに最高道徳を体得して人心救済をなすものは、年老ゆるにしたがってその徳ますます高く、他人・他族みな来たり集まりて、自己の肉親の子孫以上の親切を尽くしてくださるのであります。かの通常の人間が前記のごとき種々の娯楽もしくは嗜好に対する趣味を満足さするには、金と時間と労力とを要すること多大であって、その結果は何の得るところもありませぬのです。しかるにひとりこの人心救済

のみは、その行う人の晩年を幸福にし、且つその子孫を幸福にするのでありますから、識者たるもの、深くここに考慮せねばならぬことでありましょう。ことに普通の人にて実子のないものは、老後に至れば実に淋しいものであります。もしかかる人が最高道徳を体得して人心救済をいたしましたならば、わが実子でなくとも多数の子孫が生まれてきまして、実に楽しみな生涯を送ることが出来ます。故に人心救済は究極においては自己の幸福を招来せしむる唯一の方法であるのです」（⑧二八一―二八三）

最高道徳の実行が喜びをもたらすものであれば、その内容の重要な部分をなす自己反省、犠牲、絶対服従などが、喜びを実現する方向にあることは理解できるであろう。このことも綿密に論文の記述に従って説明しなければならないが、ここでは若干の引用にとどめる。

まず、服従（絶対服従）については、「父母の命に服従し、長上の命に服従し、且つ精神伝統の先輩の指導を受けて進むと決心したらば、実に安心でありましょう」（⑧四一二）、「感謝的に喜んで絶対服従が出来るのであります」（⑦二一二）などとある。

絶対服従は、神（自然の法則）に対するものであり、これは真実であればあるほど、喜びは大きくなるものである。

次に、自己反省については、次のような記述がある。

「いかなる事をも自己反省して感謝生活を続くる」（⑧二四四）、「自己反省たんのうしていかなることも心に喜ばねばいけません」（『助け一条の御話』五四頁）、「喜んで悔い改める」（⑧二三九）、「後悔に二つあるので、第一は道徳もしくは宗教上の教訓に感じて懺悔をなして改心すること。第二は悪事をなすかもしくは失敗を招くかして悔恨をなすことです。第一は、肉体に好影響を及ぼして精神を和らげ、疾病を治し、健康を増し、もしくは長

命を得るに至るのです。第二は失望もしくは落胆の精神作用を伴うものなるが故に、非常に身体に悪影響を及ぼして、疾病もしくは短命の結果を来たすものであります」(②一一六)

なお、広池は大正四年の困厄に際して大いに自己反省し、「神様が自分にかかる体験を与えてくださったものであるので、実に感謝のほかなき次第である」(⑨一〇三)と述べている。

また、自己犠牲については、「どんな人、どんな場合でも、人様の喜び、世の幸福の増すことならば自分は損をすると決心する、その心が安心立命で助かる心使いです」(『助け一条の御話』七五頁)と述べられている。

七、喜びの作り方

①最高道徳の実行

最高道徳の諸原理の実行が喜びの作り方そのものである。その方法について詳しく述べることはできないが、以下、その一部を垣間見ておくこととする。結局、すべてのことを喜ぶということになる。

「自分の身辺その他すべての人々のなすことを心の底より喜び、全体のものをわが懐の中に抱いてこれを温め育つる心になること」(『語録』二四五頁)、「今後は一切いかなることも堪納致しまして喜びます」(日誌　大正元年一〇月一三日)、従って、「経済的・功利的に善いもの、有益なもの、立派なものだけを喜び学ぶのは当然のことで、それは真に真実・誠のあるという証拠にはなりません」(遺稿)

最高最大の喜びは、神を相手にすることによって得られるものである。「最高道徳の実行的原理は天を畏れ且つ天を楽しむ精神及び行動によりて表現せらる」(⑦一八〇)、「大をもって小に事うる者は天を楽しむ者なり」(⑦一八一)、「神様にもたれて安心す」(日誌　大正元年一二月二六日)、「神の心に従えば安心なり」(遺稿)、「一切

の出来事を自然(神)の制裁に任せて安心し」(⑧二二九)、「この人間心を去って神の心に同化するのであるから、自ら悲しい事でも苦しむ事でも喜べるのである」(遺稿)

慈悲寛大自己反省、自我没却神意同化、伝統尊重、人心開発救済が喜びの作り方の中心であることは当然である。そうすることによって歓喜感謝の生活をしていくのである。

愛(慈悲)や感謝は重要である。ここでは愛については触れないが、感謝の心は喜びを生み出す原動力といえる。生かされていることを神・伝統の恩恵の賜として感謝するのである。

「心の中から有難い有難いという精神的な感謝生活」(『助け一条の御話』二九頁)、「自分に反対し、自分を悪口する人に感謝する心が自分の肉体の助かる資本になるのであります」(『助け一条の御話』四八頁)、「その上、何となっても一切感謝することである」(遺稿)、

その他、喜びをもたらす方法をいくつか引用しておく。

「その自己の現在の境遇を喜ぶという事が、自分という考えを捨てたためである」(遺稿)、「心を清くするのである。日々を喜ぶのである」(遺稿)、「自分のいうことを聞かぬところにて、喜んで働くのが、偉大なのである。これが安心立命である」(遺稿)、「人間の心に最高道徳がひとたび体得さるれば、自然にその顔色は温和となりて、常に喜色を帯びておるのであります」(⑨三四七)、「人心救済〈開発を含む〉の実質そのものは、自己の直接もしくは間接に関係ある人心の開発もしくは救済の事業、その他営利事業に直面する場合に当たって、その関係者のなすことを見聞し、これによりて他人のなすことを不快に感ずることなく、不平を起こすことなく、且つ他人を排斥することなく、一切の事を自己の徳の足らざるところに帰してこれを自己に反省し、真の慈悲心をもって他を愛するということであるのであります。かくて、その慈悲心を自然に他人の心に移植するに至ることがいわゆ

る人心救済であるのです」（⑧二〇九）、「直接にお助けに行くよりは、そばの人に親切を尽くし、わが身に近きものより喜ばすことを心がくれば自然に道はなるべし」（遺稿）、「先輩の恩の大なることを思い、かくて今日の境遇を歓喜感謝して、これを以前に比すれば低き、やさしき、寛き、裕けき心となり、種々無用の工夫考察を止めて、神にもたれつき、自己のことを後にして、出来得るだけ、人のため、国のために努力を致さむと欲するの心だけは常に胸中に存じ居たる次第なり」（遺稿）

②困難に対して喜び感謝する。

自分に都合がよいことを喜び、感謝することは誰にでもできることである。問題は自分に都合が悪いことが起こったとき、喜び感謝できるかどうかである。最高道徳では、このような時、神の恩寵的試練として「喜び感謝して受けとめること」の重要性を教えている。つまり、「いかなる難事に遭遇するも、みな精神的に自己反省し且つかかることも結局神の自分に対する恩寵的試練として、喜び且つ感謝してこれを受くるのであります」（⑦一一一）

「何人にても自分という考えがありては、極貧・篤疾・難病のものや、または大々的不幸に陥りし場合に、その境遇に対して自分の過去の因縁は何程悪いか知れぬのをこの位にて通せて下さるのは実に有難いというように感謝して、その人生の極度の不幸に対しても、尚且つ欣欣として喜び得るものにあらず」（遺稿）

「盛時には驕らず衰時には悲しまず。現代の人々は、その盛時には驕傲を極め、衰時には悲観し且つ煩悶して、実に醜いのであります。それ故に、いかなる人も最高道徳を服膺して、第一に、かくのごとくその運命に盛衰なきよう、第二に、いかなる幸福のときにも不幸の場合にも、安心立命しつつ最後の目的に向かって進むようになっていただきたいものであります」（⑨三八一）

「しばしば病にかかり、またかえって大病をなし、または種々の不幸に遭う如きことがあっても、かえってこれをもって神の警告と心得て喜び勇みいよいよ心を研き日の寄進をなさねばならぬのである」（遺稿）、「いかなる逆境も喜びつつ切り抜くるのであります」（①序四三）、

更に、次のような言葉を残している。

「盗賊や、殺人者があなた方を鋸引きにして四股を切断するというときに、苛立つようなものはわたしの教えを守るものにならない」（⑦八二）、「自分の世話したような人からボロクソに言われ、田んぼに蹴落とされ、足蹴にされ、青痰ひっかけられても、その後ろ姿が拝めるようになれたら、私の弟子にしてよい。その時が最高道徳の入門の時であると同時に卒業の時でもある」（『語録』一四七頁）、「すべて馬鹿にせられて、これをタンノウする心使いありてこそ、今世界中、第一の最高道徳者なれ」（日誌　大正一一年八月二日）、

聖人はこのような苦難に直面しても喜びを失わなかったと、広池は、「かくて人心救済のためには、諸聖人みな幾多の苦心苦行をなされてのでありますが、自己自身にはそれが苦心でもなく、苦行でもなく、真に無上悦楽の業であって」（⑥一八五）と述べている。

広池自身も、天理教と関係していた時期、多くの苦難に直面したが、次のような考え方で切り抜けている。

「いかなる事も神の御手入れと思い、大いに喜びてタンノウせねばならず」（日誌　大正三年六月一一日）、「予はもちろん今回の事を、我が生命ととりかえ下されしものとして喜び居れり」（日誌　大正四年四月七日）、「大正元年に死せしと思えば何の恨みもなし、極度の苦しみを見てタンノウせずば、いかでか世界を助くるを得ん」（日誌　大正一三年七月二日）

最後に、喜びが大きな力をもっていることを付記しておこう。